

# 平城京左京二条二坊十一坪 発掘調査 現地説明会資料

平成9年3月8日

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

## 1 はじめに

この調査は、法華寺町内で計画されている住宅地建設工事にもない、奈良国立文化財研究所が奈良県教育委員会の依頼をうけて、平城宮跡第279次調査として実施しているものです。1月8日から調査を開始し、現在まだ中途段階にありますが、これまでにわかったことを報告します。

調査地は平城京の条坊でいうと左京2条2坊11坪にあり、平城宮東院と東北角を接する位置であることから、京の中でも重要な場所であったと思われます。また、奈良時代後半に総国分尼寺として大伽藍をほこった法華寺の寺域とも、二条条間路を挟んで接しています。これまでこの11坪の中で発掘調査がおこなわれたことはありませんが、坪の東を画する東二坊坊間東小路について、昭和\*\*年に奈良市教育委員会が調査を行い、位置と規模を確認しています。またこの周辺地域で近年急速に進行している開発に対応して行われている発掘調査により、少しずつではありますが、平城宮に近い左京の北部地域の様相が明らかにされつつあります。

## 2 みつかった遺構

**大規模な中心殿舎群** 今回の調査区は1500㎡の広さで、11坪の東北寄りの場所にあたります。たくさんの遺構が確認されつつありますが、中でも注目されるのは、大きな柱掘形をもつ5棟の掘立柱建物です。調査区の西南隅近くに約3m(10尺:1尺=29.6cm)間隔で4間の柱列(建物12)がありますが、想定される坪の中心線から35尺の位置にあり、桁行が10尺等間で7間、総長70尺の建物を推定することができます。おそらく四面庇をもつ桁行7間、梁間4間の建物だったのでしょう。調査区の西北隅には直径が2mにおよぶ柱掘形をもつ東西棟(建物1)があります。桁行は5間分確認しており、まだ西に続いています。梁間2間の柱間寸法は9尺です。桁行は東の端の柱間が10尺、ほかの3間が9尺と復元することができます。この建物はいったん解体され、1mほど位置を東にずらして建て替えられています(建物2)。その際に南に庇を設けています。建物1と同様に桁行の東の端間だけを10尺に設定しているようです。

建物12のすぐ東には西庇をもつ大きな南北棟があります(建物10)。柱間寸法は10尺等間で7間分確認しています。調査区の南に続いていると思われます。建物12と14mの間隔をおいて東に東西棟建物33があります。桁行5間、梁間2間のこの建物は建物12の身舎とちょうど並んだ位置関係にあります。建物33は南北棟建物10より古いものです。南北棟10はのちに梁間2間だけで庇のつかない南北棟建物14に建て替えられます。柱間寸法は建物10と同じく10尺等間です。北の3間分を確認しています。建物1と12の間に東西棟建物9を想定することもできます。みつかったのは東の妻の部分だけですが、坪の中心線で折り返しますと桁行総長77尺となりますので、11尺等間7間、梁間は2間、9尺等間と考えられます。

以上の5棟の大規模な掘立柱建物は、坪の中心線を軸にして左右対称に配置する建物群を構成していた可能性が強く、建物34をのそくと、建物12を中心建物(主殿)とし、建物10を東脇殿、建物9および1を後殿とする整然としたコの字型あるいは口の字型の建物配置を推定することができます。

今のところ、この中心殿舎群と同じ時期に存在した遺構がどれであったのか、まだ厳密に特定で

きていません。南北方向の塀8の位置は脇殿（建物11）の妻通りあるいは後殿（建物2）の東側柱通りと位置しますので、脇殿と後殿の間をざっと閉塞する施設だったとも考えています。また復元図では、調査区の東半部にある東西塀22と、それに南からとりつく南北塀23を、敷地を大きく区画する施設なので中心殿舎群と共存するものとして図示してみました。東西棟建物25は、南北塀23と柱筋が一致すること、建物29は25と西側柱筋がそろっていることを一応の根拠として、同時期のものと仮定しました。この南北塀23に併行する溝27も同時期のものと考えられます。

その他にも桁行3～4間、梁間2間の掘立柱建物を数棟確認していますが、いずれも南北塀23をまたいでいないことは、この周辺が一貫して塀23や溝27で区画されて使われていたことを示すものといえます。中心殿舎群のある一画には、時期の前後関係の不明な東西棟建物7以外は、建物3、15ともに新しい時期のもので、中心殿舎群に先行する遺構は、やや湾曲した南北溝4の他はありません。この11坪に、奈良時代のいつ頃から建物がつくられるようになるのか、現時点でははっきりしませんが、最初に造営されたのは、大規模かつ整然とした配置をとる中心殿舎群であったのではないかと考えています。

**壁のあったことを示す遺構** 調査区東北隅近くは、水田耕作土の下に、瓦の小さな破片の混じった小砂利層が分厚く堆積していました。それをとりのそくと、東端では直径5cmほどの砂利をきちんと敷き詰めた面（石敷20）がありました。その砂利敷きに覆われるように建物19が埋まっていた。この一画は周辺よりもやや小高く遺構面が残っていました。つまりそれだけ遺構の残存状態がよいといえるのですが、建物19は、掘立柱の堀形と堀形の間幅30～40cmの溝があり、その上に平瓦を縦に半分に割ったものを一列に敷き並べていました。これは寺院遺跡の礎石建物跡でたまに確認されている、壁の基礎部分にしつらえられる地覆と同じ構造です。掘立柱に壁がつくられていたことを具体的に示す珍しい遺構です。

### 3 掘り出された遺物

**大量の緑釉瓦と軒瓦** 緑色の釉薬（うわぐすり）をかけた瓦は、普通の瓦にくらべると出土量はわずかであり、出土する場所もたいへん限られています。今回の調査区内から、これまでに100点をこえる緑釉や三彩の瓦が掘り出されています。宮内でもこれほどまとまった数の施釉瓦が出土した例はなく、京内では、左京2条2坊12坪、つまり今回の調査地に南接する坪で出土した緑釉、二彩、三彩の瓦90点が図抜けて多い例でした。出土場所も宮内の数カ所をのそくと、京内では平城宮に近接した左京域の一部分だけであり、今回の事例は、ここがまさに平城京の緑釉瓦ゾーンの最中心部分であったことを示すものかもしれません。ただし、注目すべきことに100点ほど（釉薬の剥落したものを含めると200点に達しますが）の80%は熨斗（のし）瓦です。施釉した平瓦や丸瓦はほんの数えるほどしかありませんし、軒丸瓦、軒平瓦は1点ずつあるだけです。また出土した地点は調査区の西北隅付近つまり建物1および2の周辺に集中しています。緑釉熨斗瓦の使われた建物を示すものでしょう。熨斗瓦は堤瓦とも呼ばれ、屋根の棟の部分に積み重ねて使う特殊な道具瓦で、出土品からは、釉薬は重ねた際に露出する部分に限って施されている様子がよくわかります。

施釉瓦とともに、軒瓦も数多く出土しています。これまでに200点をこえる軒平瓦、軒丸瓦が調査区の全域から発掘されましたが、1アール（10m×10m）あたりの出土量にしますと15点ほどになります。この数値も、さきに示した南接する左京2条2坊12坪の14点/1aとともに、京内では群を抜いた高いもので、平城宮内でもこれほどの高密度で軒瓦の出土する地域はそう多くありません。

ここからは亀甲文のある二彩陶器片や同じく二彩壺の小片、それに漆器も出土しており、この坪の性格を反映しているものと推量されます。

木簡とゴミ捨て穴 脇殿と思われる建物10と同じ場所で、さしわたし5m×3mばかりの浅い穴が見つかりました。この土坑11は建物10がなくなったあとに掘られたもので、深さ40cmの穴の中には瓦や土器のかけらの他に、薪の燃えさしや灰のような真っ黒な草木灰のようなもの、屋根葺きに使ったと思われる檜の皮（ひわだ）、それに大便のあとに局部に始末をするための道具、つまりこんにちのトイレトーパーにあたる小さな薄い板状の木片（籌チュウ・捨て木）もいくつか埋まっていました。籌であることの特徴はいくつかありますが、その一つに、けっして火にかけられた形跡がないことがあげられます。埋め土の大部分には植物質や小さい木片などがたくさん含まれており、発掘にあたっては土ごと採取しましたので、まだ大半は整理のための水洗いを待っている状態ですが、これまでに木簡2点がみつかりました。そのうちの1点は荷札形の木簡で、

（表面）若狭国遠敷郡遠敷郷 秦日佐大村  
御調塩三斗

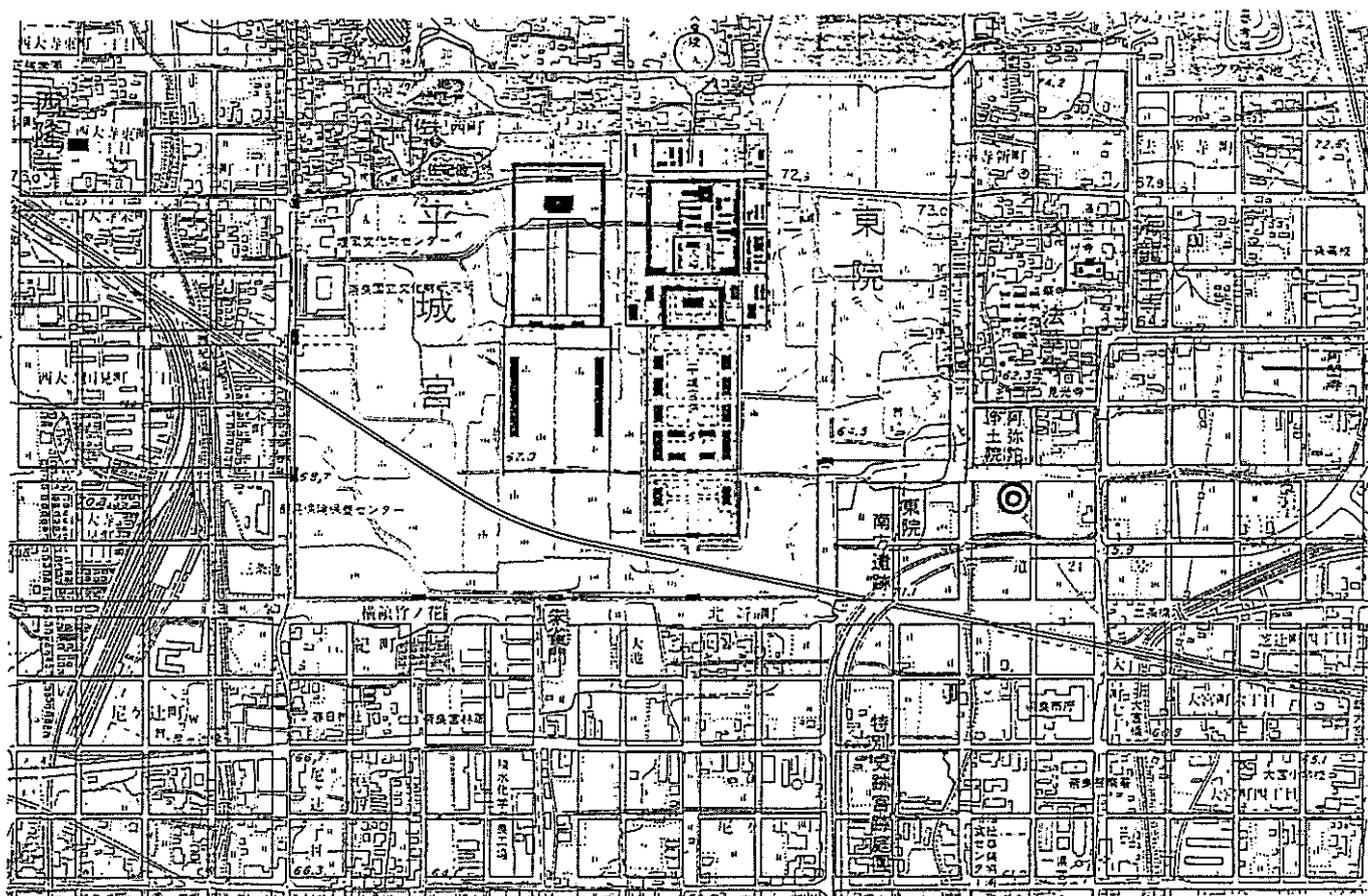
（裏面）天平宝字六年九月

と墨書されていました。天平宝字6年は西暦762年ですが、いっしょに埋没していた土師器をみると、もうすこし新しい年代のものもあるようです。いずれにしてもこの土坑11は建物10から14への建て替えの年代を示す可能性もあり、さらに遺物の整理分析の進むのを待ちたいと思います。

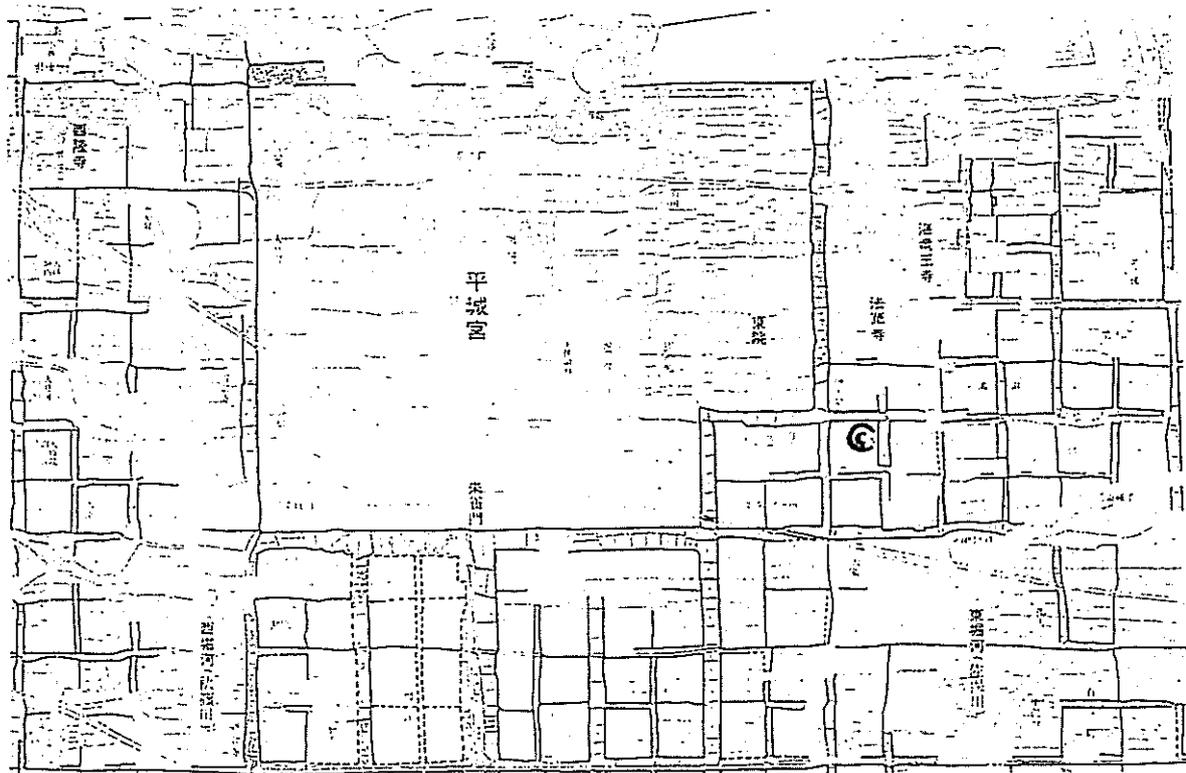
#### 4 まとめ

左京2条2坊11坪は平城宮東院の東南角に接する位置にあり、同じく平城宮東南隅と角を接する左京3条2坊1・2・7・8坪が、奈良時代の初めには、時の最高の実権者であった左大臣長屋王の邸宅があり、政争による彼の死後には光明皇后の皇后宮となった、京内では、きわめて格の高い場所であったのと共通する、あるいはそれ以上に枢要だったと思われる立地条件にあります。整然と配置された大規模な殿舎群が確認され、大量の施釉瓦や軒瓦、あるいは当時稀少価値の高かった高級な器である二彩陶器や漆器が出土したことなどは、この敷地が一般の京人や普通の官人の住居地ではなかったことをはっきりと示しているといえます。また、出土した軒瓦は（まだ整理分析が十分ではありませんが）平城宮内で使用されているものとの共通性が強く、「御調塩」の荷札木簡の存在も合わせて、きわめて宮的、公的色彩が強いということができそうです。

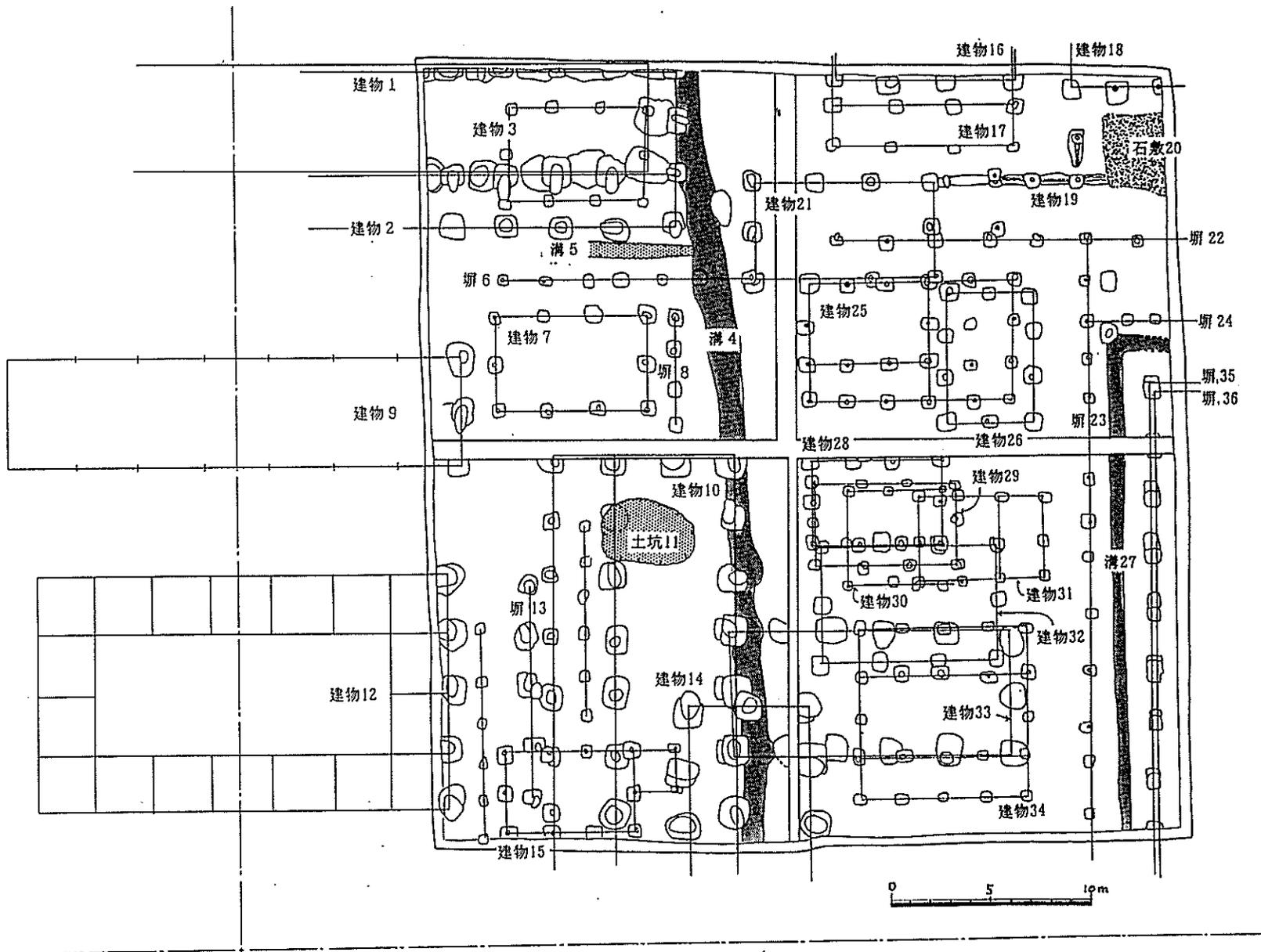
これまでに発掘調査で確認されている京内での大規模宅地の建物配置状況と比較してみると、長大な建物で正殿を囲むというスタイルでは、まったく同じタイプのものはありませんが、左京3条1坊15・16坪の建物配置が類似しています。ただし規模はかなり小さいものです。また7世紀の後半期と、少し年代は古いのですが、飛鳥石神遺跡の長廊状の建物で内部の建物群の四囲を囲んだ例や藤原京左京11条3坊西南坪の例も似たタイプといえるかもしれません。以上にあげた3例とも、公的な施設と考えられています。条坊の1坪を占め、京内では最大級の建物群を左右対称形に配置したと復元できる今回の調査地の遺構群については、宮的、公的な性格をもった施設であったと考えていますが、あるいは有力な貴族の邸宅であっても、敷地内に公的な空間を備えていたということも想定しておく必要があります。具体的な性格解明に至るには、まだまだもう少し調査を進めなければなりません。



第1図 調査地周辺条坊復元図



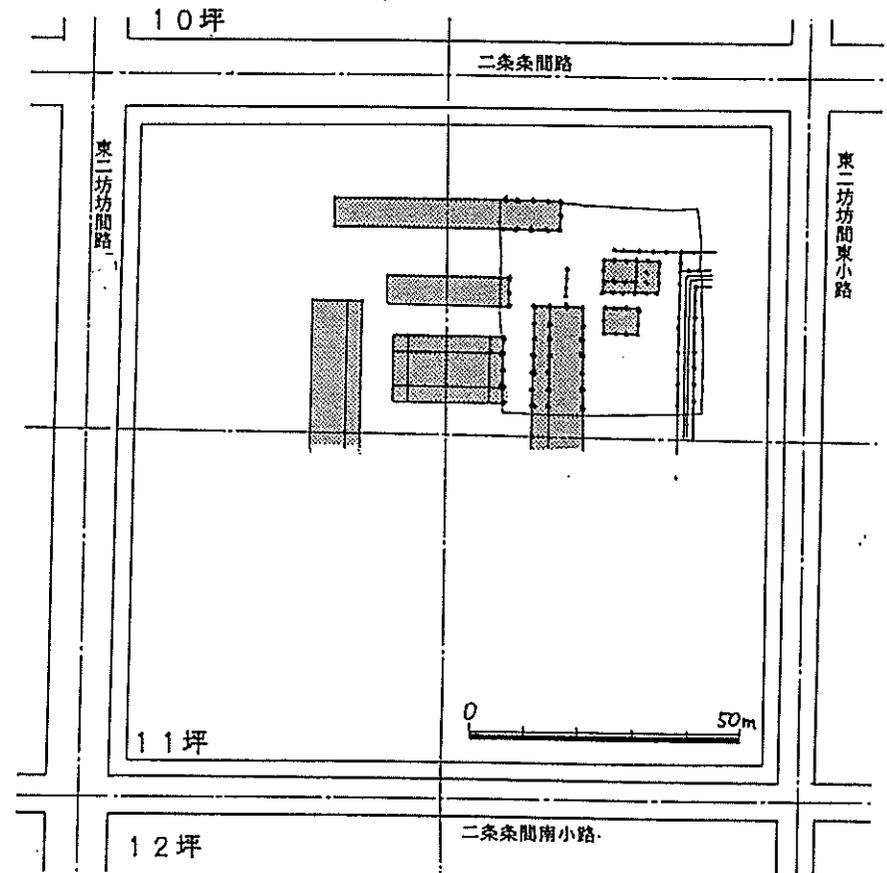
第2図 調査地周辺条坊遺存地割図



第3図 検出遺構図 (1:300)

遺構規模一覧表 ( )は推定

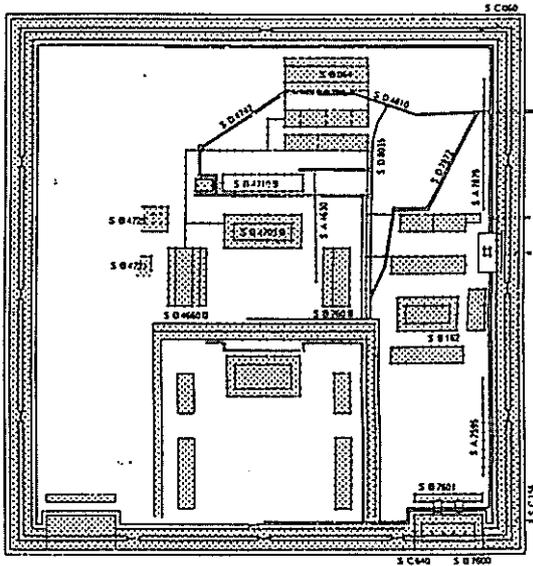
No.	方向	正面×側面		ひろさ	
建物1	東西棟	(15)×2間	(40.8)×5.4m	(220.3㎡)	(66.8坪)
建物2	東西棟(南庇)	5以上×3間	16.6以上×8.0m	132.8㎡以上	40.3坪以上
建物3	東西棟	3×2間	6.5×4.7m	30.6㎡	9.3坪
塀6	東西塀	6間	12.4m	-	-
建物7	東西棟	3×2間	7.1×4.7m	33.4㎡	10.1坪
塀8	南北塀	3間	5.3m	-	-
建物9	東西棟カ	(7)×2間	(22.8)×5.3m	(120.8㎡)	(36.6坪)
建物10	南北棟(西庇)	7以上×3間	20.7以上×8.9m	184.2㎡以上	55.8坪以上
建物12	東西棟(四面庇)カ	(7)×4間	(20.7)×11.8m	(244.3㎡)	(74.0坪)
塀13	南北塀	4間	10.4m	-	-
建物14	南北棟	2以上×2間	5.9以上×5.9m	34.8㎡以上	10.5坪以上
建物15	東西棟(角屋付き)	3×2間	6.2×4.1m	25.4㎡	7.7坪
建物16	東西棟カ	3間×?	8.6m×?	-	-
建物17	東西棟(南庇)	3×2間以上	8.9×3.6m以上	-	-
建物18	東西棟カ	2間以上×?	4.1m以上×?	-	-
建物19	東西棟カ	4間以上×?	8.3m以上×?	-	-
建物21	東西棟	3×2間	8.9×4.7m	41.8㎡	12.7坪
塀22	東西塀	6間(以上?)	15.0m	-	-
塀23	南北塀	13?間以上	29.5m以上	-	-
塀24	東西塀	2間(以上?)	2.9m(以上?)	-	-
建物25	東西棟(南庇)	5×3間(?)	9.8×5.9m	57.8㎡	17.5坪
建物26	南北棟	3×2間	6.2×4.1m	25.4㎡	7.7坪
建物28	東西棟	3×2間	6.2×4.1m	25.4㎡	7.7坪
建物29	東西棟	3×2間	7.1×4.1m	29.1㎡	8.8坪
建物30	東西棟	3以上×2間	4.7以上×4.7m	22.1㎡	6.7坪
建物31	東西棟	3×2間	6.2×4.1m	25.4㎡	7.7坪
建物32	東西棟	3×2間	8.9×5.9m	52.5㎡	15.9坪
建物33	東西棟カ	5×2間	13.9m×5.9m	82.0㎡	24.6坪
建物34	東西棟(南北庇)	4×4間	8.3×8.3m	68.9㎡	20.9坪
塀35	南北塀	8間(以上)	22.1m(以上)	-	-
塀36	南北塀	8間(以上)	20.8m(以上)	-	-



第4図 左京2条2坊11坪

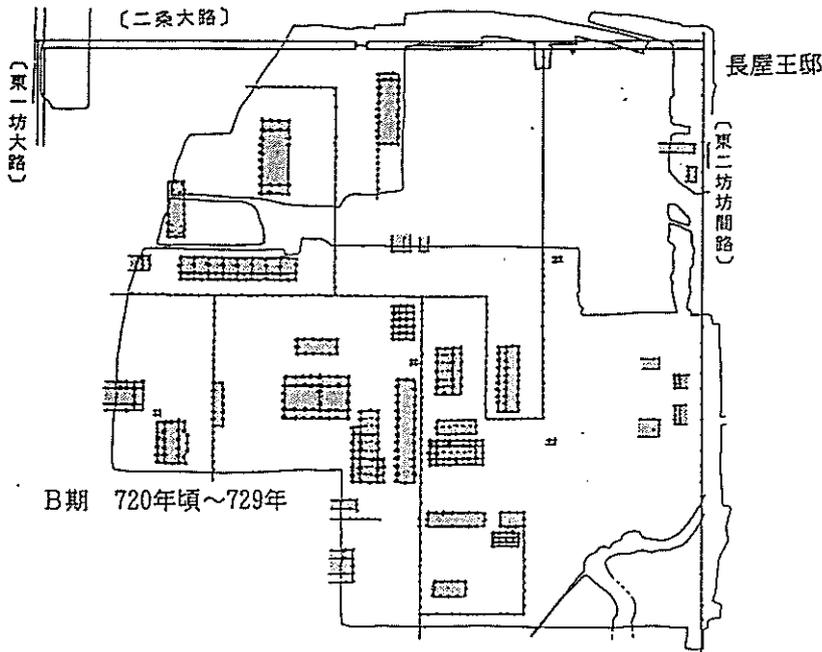
建物配置復元想定図 (1:1000)

平城宮内裏地区

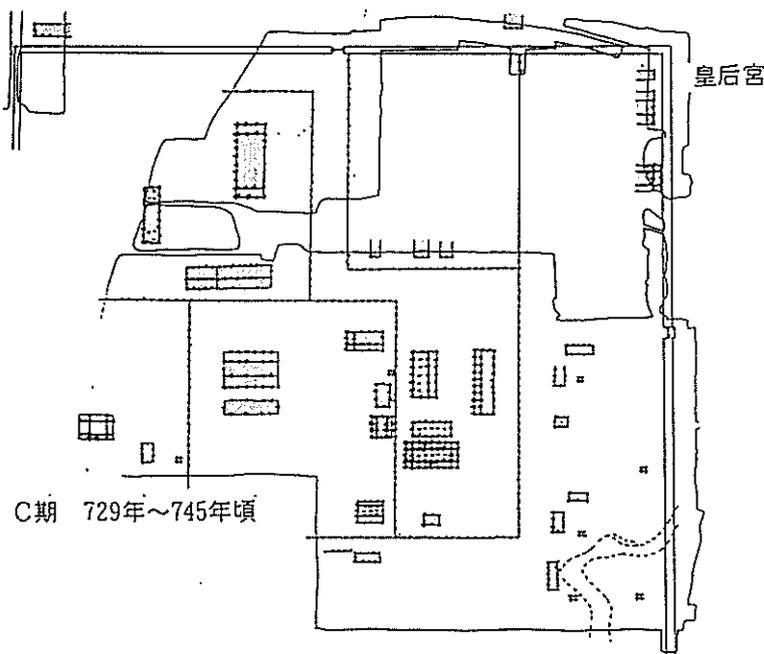


第Ⅲ期  
平城遷都(745)頃～天平宝字4年(760)頃

左京3条2坊1・2・7・8坪

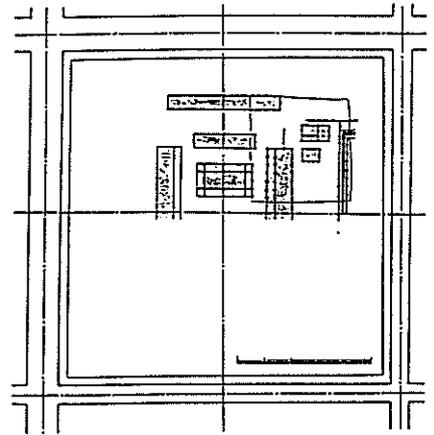


B期 720年頃～729年



C期 729年～745年頃

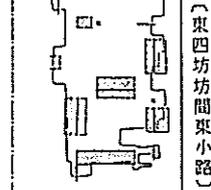
平城京左京2条2坊11坪



平城京9

左京3条4坊12坪

(三条条間南小路)



第Ⅲ期

(三条大路)

奈良時代後半～末

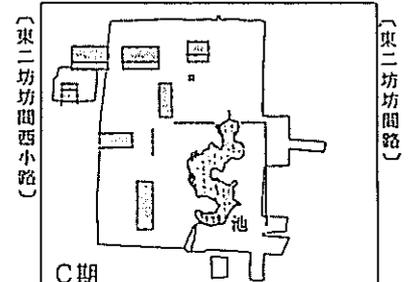
\*1/2町規模の宅地

平城京4 左京3条2坊6坪

\*園地を中心とする離宮施設

または親王などの邸宅

(三条条間路)

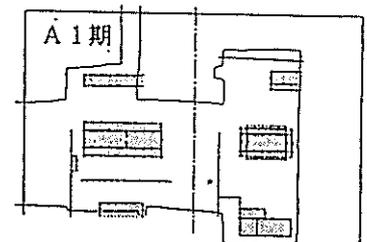


C期

天平末年・天平勝宝年間～

(三条条間南小路)

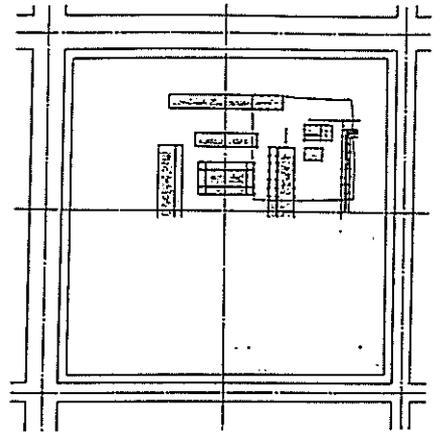
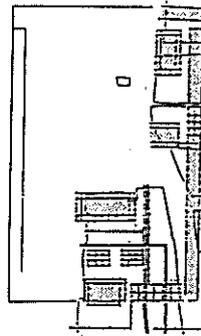
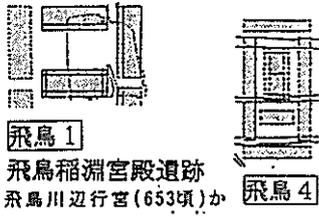
平城京5 左京3条2坊15坪



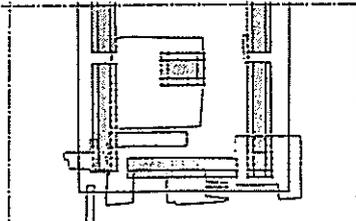
～神龜・天平初年(730)前後

長舎型郭型

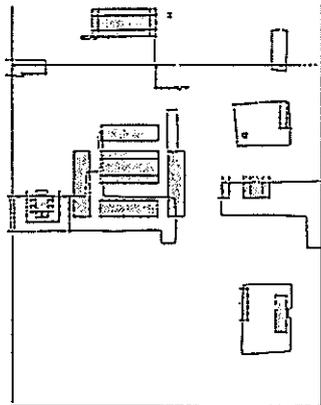
斑鳩1  
法隆寺東院下層  
斑鳩宮(601~643)か



平城京左京2条2坊11坪

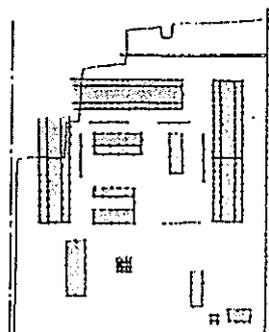


藤原京1 左京11条3坊西南坪  
7世紀後半(飛鳥IV)~藤原宮期



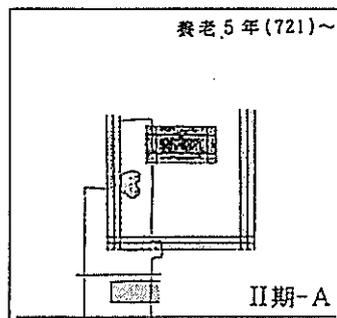
奈良時代を通じて同様の  
建物配置 存続

平城京2  
左京3条1坊15・16坪

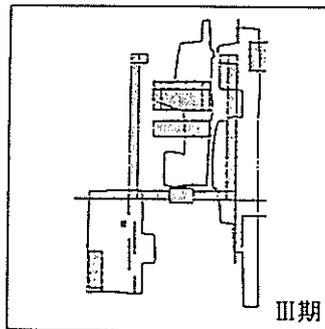


平城宮12  
(左)馬寮地区第IV期  
天平宝字頃~延暦3年(784)

回廊型郭型

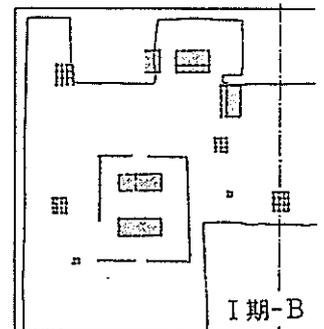


平城京1 左京2条2坊12坪

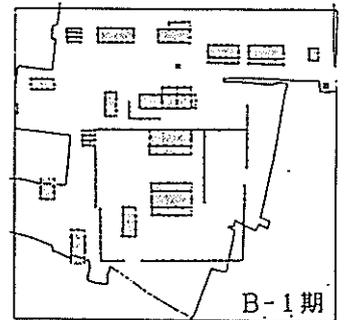


平城京10 左京4条2坊1坪  
奈良時代後半

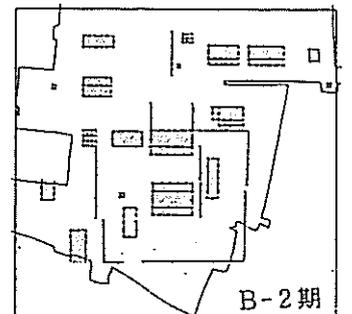
塀型郭型



平城京11 左京5条1坊1坪  
奈良時代中頃に築絶

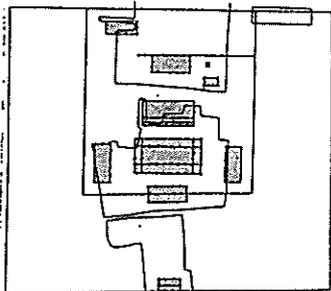


平城京7 右京3条3坊1坪

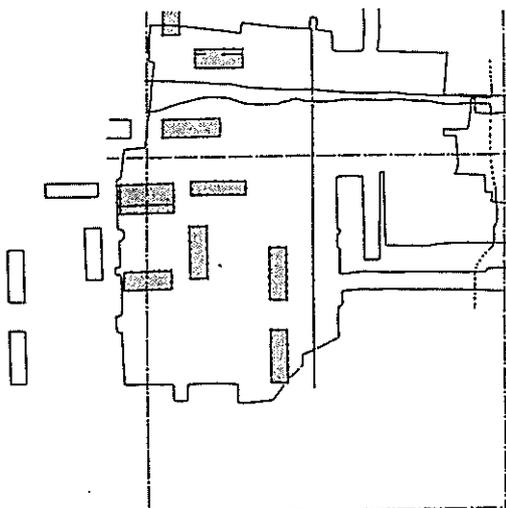


平城京7 右京3条3坊1坪

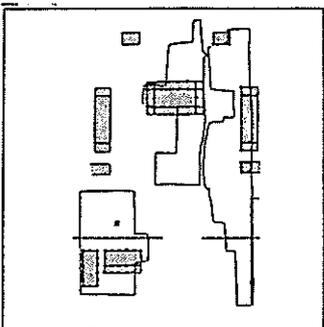
対称コの字型



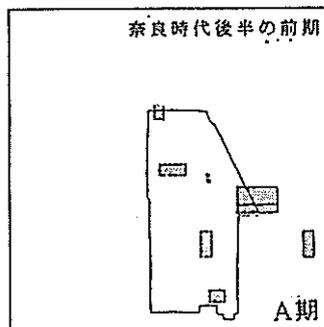
藤原京2 藤原京期  
右京7条1坊西南坪



藤原京3 左京6条3坊 藤原京B期

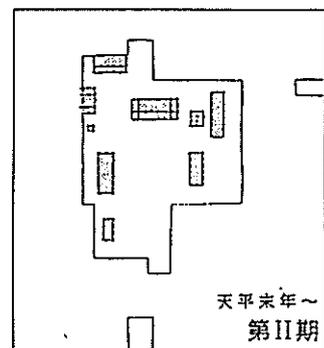


平城京10 奈良時代前半・中葉  
左京4条2坊1坪 II期

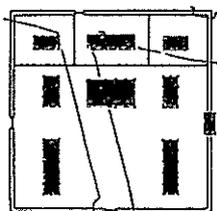


奈良時代後半の前期  
平城京3 左京3条1坊7坪 A期

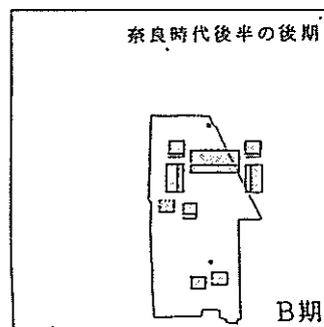
非対称コの字型



天平末年～  
第II期  
平城京12 左京5条2坊14坪



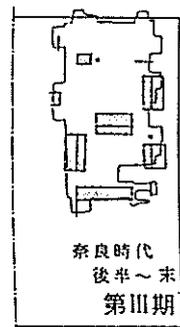
奈良時代後半  
平城宮2 兵部省



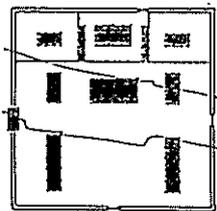
奈良時代後半の後期  
平城京3 左京3条1坊7坪 B期



奈良時代  
中葉～後半  
第II期  
平城京9

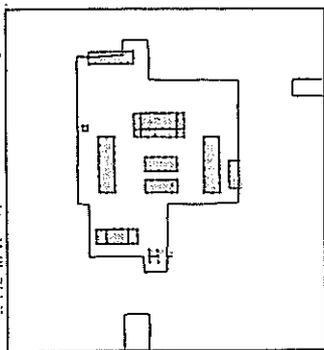


奈良時代  
後半～末  
第III期

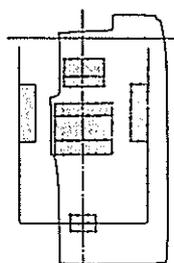


奈良時代後半  
平城宮3 式部省

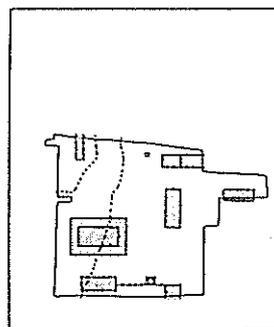
左京3条4坊12坪



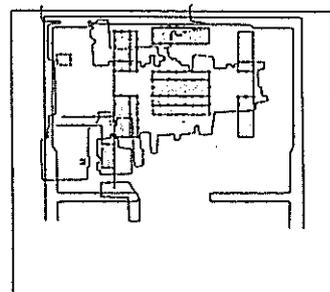
平城京12 ~延暦3年(784)  
左京5条2坊14坪 第III期



長岡京1  
左京2条2坊10町



奈良時代末期  
平城京8  
左京3条4坊7坪



第II期  
平安京1 右京1条3坊9町